2021年7月31日に開催された座談会。浅石さんは東京都よりリモート参加。

座談会

学生ボランティア「風土熱人R」の活動を振り返る

2007年に災害支援や地域貢献活動を目的に設立された学内サークル「風土熱人R（ふうどねっとあーる）」。その発足の経緯や活動への思い、そして東日本大震災での支援の様子を、初代代表の浅石裕司さん、東日本大震災時に代表だった早川陽さん、現代表の村山健介さんに対談形式で語ってもらいました。

地域貢献＋災害支援を目的としたボランティアサークル

浅石　私が風土熱人Rを立ち上げたのは2007年のことでした。当時岩手県立大学にはボランティア系サークルが7つくらいあり、私もそれらに所属し活動していたのですが、ある時「地域のニーズに応える」ことに特化したサークルがないことに気づいたんです。地域に貢献するボランティアがしたいと考えていたところ、たまたま初代顧問の山本克彦先生（現　日本福祉大学教授）の研究発表を聞く機会があり、そのテーマが被災した子どもの支援でした。その中で山本先生が「学生にもできることがある」というお話をされていて。地域づくりに普段からボランティアや外部の人たちが関わっている地域は災害にも強いことを知り、地域貢献と災害支援を一緒にできるサークルとして風土熱人Rを立ち上げました。

村山　現在も設立当初の理念を踏襲しています。減災・防災への取組や内陸避難者の皆さんの交流会など復興支援のほか、フードバンクや子ども食堂など地域貢献活動にも積極的に取り組んでいます。メンバーは現在87名。いろいろな学部の学生が参加しています。

浅石　2007年7月に新潟県中越沖地震が起きた際には、風土熱人Rも現地に行ってボランティア活動を行いました。その経験を生かし2008年には学内に学生ボランティアセンターを立ち上げ、こちらも私が初代代表を務めました。

早川　私は高校の頃から人と関わる活動やボランティア活動がしたいと考えていて。それが社会福祉学部を選んだ理由でもありますが、大学に入り風土熱人Rや学生ボランティアセンターの存在を知り、すごく魅力的な活動だなと感じました。

村山　東日本大震災が起きたとき私は10歳だったんですが、自分が何も行動を起こせないことにやるせなさを感じていたんです。震災後の2013年、私が中学生の時に総合政策学部生による災害体験授業を受け、その中で「災害が起きた時、学生の行動が大きな力になる」という言葉を聞いて、防災について学びたいと考えるようになりました。風土熱人Rについては入学前に大学案内パンフレットで知り、ぜひ参加したいなと。実はこのサークルの存在が、岩手県立大学を選んだ大きな理由にもなりました。

災害ボランティアセンターの立ち上げと運営に奮闘

浅石　東日本大震災が起きたまさにその時、実は私はフィリピンにいたんです。岩手県立大学のプロジェクトの一つとしてフィリピンで井戸を掘るという国際貢献活動をしていました。山本先生や学生ボランティアセンターの後輩たち、中越沖地震で共に活動したNGOの皆さんも一緒でした。現地では情報がなかなか入ってこなかったので不安な気持ちでいっぱいでした。1週間後くらいにやっと帰国することができました。

早川　発災時の風土熱人Rの代表が私でした。震災の翌日、翌々日くらいにはボランティアに参加することができるメンバーが学生ボランティアセンターに集まり、メンバーの安否確認をしたり、当時行っていた地域の見守り活動で訪れていた高齢者のお宅を訪問したりしました。情報収集などを進めながら、

Member

村山 健介さん

岩手県立大学総合政策学部3年。2021年2月より風土熱人Rの代表を務める。

早川 陽さん

2013年、岩手県立大学社会福祉学部卒業。卒業後は、盛岡赤十字病院に医療ソーシャルワーカーとして勤務。

浅石 裕司さん

2012年、岩手県立大学社会福祉学研究科博士前期課程修了。（一社）子どものエンパワメントいわて、社会福祉法人等の勤務を経て、2020年より日本福祉大学福祉経営学部助教。

多くのボランティアの受入拠点となった陸前高田市災害ボランティアセンター

発災から1週間たたないうちに学生のボランティア拠点を立ち上げることができたと記憶しています。今何をすべきか、逆にすべきでないことは何かなどをメンバーと話し合いました。

浅石　私たちがフィリピンから帰ってきた時、後輩たちがすでに学生ボランティアセンターを稼働させていたのはすごくうれしく、同時に頼もしいなと思いました。顧問や学生ボランティアセンターの代表などもフィリピンに行って不在の中、残った早川君をはじめメンバーが自分たちで動けたのはこれまでのトレーニングの成果であり、これまで活動してきた意識の高さであるなと思いました。

その後、山本先生や全国組織のNGOが沿岸地域を視察。私も釜石市に行く機会を得て、現地の対策本部や社会福祉協議会の方々からお話を聞くことができました。私たちには中越沖地震での経験もあったことから、全国から来るボランティアの対応などを手伝ってほしいと言われました。そしてこれは本当に偶然なんですが、釜石市の対策本部に当時の岩手県立大学の相澤徹理事長がいらっしゃっていて、釜石に住む娘さんのお宅に学生をホームステイさせてもいいよとおっしゃっていただきました。ほぼ同時期に陸前高田市にも支援チームを作ろうということになり、早川君をはじめとした陸前高田市チーム、私や当時の学生ボランティアセンター代表の八重樫綾子さんを中心とした釜石市チームを作り、すぐに現地に向かい支援の体制を作りました。

災害ボランティアセンターでのボランティア受付、マッチング等の活動の様子

早川　そういう体制ができたのは、釜石市も陸前高田市も発災から10日前後くらいですよね。それから大学が始まる4月半ばくらいまでの約1カ月間、釜石市と陸前高田市をメインに、社会福祉協議会と連携しながら現地のボランティアセンターの運営や支援に関わらせていただきました。

ボランティアの調整は主に社会福祉協議会が行うのですが、職員の方が亡くなっていたり被災したりで圧倒的に人手が足りていなくて、机の配置から動線の確保、いつからボランティアを集めるか、情報をどう発信していくのか、そもそも避難している地域の皆さんのニーズをどう集めてボランティアとつなぐかなど、ボランティアセンターの根幹の部分をお手伝いさせていただいた感じです。

釜石市では相澤理事長の娘さんのお宅に寝泊りさせていただきながら、陸前高田市では最初は体育館横の小さなテントから始まり、その後はドライビングスクールの宿泊施設で警察や自衛隊の方々と一緒に泊まり、シフトを組んで人が途切れないように引き継ぎをしながら活動しました。

日頃のトレーニングと経験が生かされたボランティア活動

浅石　あのとき迅速に動けたのは、非常時にどう活動するかというノウハウがしっかり蓄積できていたことが大きかったと思います。実際のところ、発災から10日前後で現地に行くのは非常に危険なことでもあります。学内でも学生を派遣することに対して意見が割れたそうです。

PTSDになったらどうするんだとか、現地での安全は確保できるのかとか、さらにいえば現場に行って実際に学生が役に立つのか?という意見もあったようです。

でも私たちは、さまざまな災害現場を経験した方々と合宿したり勉強したりもしていたんですよね。山本先生と一緒に神戸を視察したり、災害を想定したキャンプを西和賀町で行ったり、繰り返しトレーニングを積んでいました。電話対応の仕方や情報をメンバー間で共有する方法などにも慣れていました。また日頃から、災害時に気をつけるべきことや必要だと思われることもリストアップしていて勉強していたので、それらを踏まえて活動に臨めたことは非常に大きかったと思います。

早川　実際にそれらの経験や知識は現場でも生かされたと思います。浅石さんたちが中越沖地震の支援活動で得た、「自分たちに必要なものは自分たちで用意し現地に行き、活動して帰ってくる」という「自己完結的」な支援が必要だという認識のもとトレーニングを積み重ねてきましたから。寝泊りする場所を探すところから地域の方と関係を築きニーズを把握するという、実際の現場でどう行動するかを常に意識したトレーニングをしていたので、もちろん実際の災害現場は初めてで未経験のことはたくさんありましたが、トレーニングから推測し、イメージできることも多かったです。

ボランティア対応課題

沿岸市町村

宿泊施設や窓口不足

県外から続々 対策急務

被災地では、全国から訪れるボランティアへの対応が課題となっていた(岩手日報2011年4月11日付)

村山　今もそういった防災に関する研修などは行っていますが、コロナ禍で昨年度はほとんど活動ができませんでした。私たちが最後に現地で活動したのは一昨年の台風19号のときなので、今の2年生以下は実際に災害現場に行って活動した経験がありません。内陸避難者の方々との交流会や防災研修をするにしてもメンバー全員が参加するのは難しい状況で、いざ災害が起きた時、先輩たちのように行動できるか少し不安なところもあります。

県立大生が活動をリードできた要因とは?

浅石　鳴り止まない電話をとり、次から次へとボランティアを差配する…そんな1カ月でした。4月に大学が始まった後も土日を利用して物資を運んだりと支援は続けていましたが、次の大きな活動が夏休みでした。全国から多くの学生ボランティアが来てくれていましたが、マッチングがうまくいかないことも多かったです。それを解決しようと組織されたのが「いわてGINGA-NETプロジェクト」でした。岩手県立大学だけでなく他のNPOなどとも協力して取り組んだ活動ですが、2カ月間で全国から1000人のボランティアを受け入れました。

早川　岩手大学をはじめ他大学と一緒に何かするというのは今では当たり前のような感じですが、GINGA-NETがひとつのきっかけだったなと今振り返って思います。

浅石　その中でも岩手県立大学生が活動をリードできていたんじゃないかと思います。風土熱人Rや学生

岩手大学の学生と協働し、災害ボランティアセンターの運営をサポート

ボランティアセンターって、「寄せられたニーズに応える」というノウハウをすでに持っていたんですよね。要望をどうまとめて、どうわかりやすく伝えるか。そしてもう一つ大きかったのが、「自らニーズに気づいてプロジェクトを立ち上げる」という訓練ができていたことです。ニーズを見つけて、考えて、自分たちにできることを自ら企画提案する、場合によっては助成金を獲得したり行政と協働するなどいろんな方法でそれを実現するためのトレーニングを積んでいました。例えば避難所や仮設住宅が建ったことで子どもの遊ぶ場所がないということを見聞きしたら、次はそういう活動をしてみようだとか、社会福祉協議会の人に提案してみようだとか、そこまで行動できる学生が多かった。現場で活動をリードできた要因はそのあたりにあるんじゃないかと私は思います。

早川　同時に、周囲からの岩手県立大学への信頼みたいなものも感じました。風土熱人Rや学生ボランティアセンターの活動の実績もそうですし、山本先生はじめ教職員の方々のこれまでの活動を通じ、「岩手県立大学の学生なら任せて大丈夫」と地域の皆さんに受け入れてもらえた気がします。

村山　現在も先輩たちと縁のあった地域の方々とのつながりは続いていて、例えば漁業を手伝ったりお祭りに参加したり清掃活動をしたりと、先輩方が培ってきたネットワークを引き継いで私たちも活動しています。

東日本大震災での活動が自身に与えた影響とは

早川　当時の活動の経験は、挙げればきりがないほど今の仕事にも生きています。私の場合、職業を選ぶ際にもかなり影響を受けました。困難な状況にある方をサポートしたいという思いはずっと持っていましたが、震災を機にさらに強くなりました。今私は医療ソーシャルワーカーとして患者さんやご家族のさまざまな課題解決に向き合っていますが、その原点はやはり震災の経験です。災害支援や災害救護が事業の一つである赤十字を選んだのも、何か有事があった時には今度は職務として支援に関わりたいと思ったからです。

浅石　私は大学院を修了後、山本先生が立ち上げた「子どものエンパワメントいわて」の職員に。子どもたちの学習支援などを宮古市や釜石市、陸前高田市、大船渡市などで行いました。その後は社会福祉法人に勤務し、特別養護老人ホームや障害者施設、地域包括支援センターなどさまざまな福祉の現場を経験しました。

発災直後に活動した陸前高田市街の様子

　ニーズを把握し分析し、それを支援につなげるという流れは、地域づくりでも一人の利用者さんと接する時でもやることはまったく同じです。そのバックグラウンドに、風土熱人Rや学生ボランティアセンターなど岩手県立大学でのさまざまな経験が生かされていることは間違いありません。

災害ボランティアセンタースタッフによる1日の振り返り活動の様子

村山　私も風土熱人Rに入る前と入った後では意識が大きく変わりました。高校までなら災害のニュースを聞いても自分がどう逃げるか、どうやったら生き延びられるかなどどちらかというと自己中心的な、守られる側の視点でしか見られなかったのですが、さまざまな地域に行って活動したことで、災害が起きた時にどうすれば周りの人たちを守ることができるのか、どう行動すべきなのかという支援する側としての意識が醸成されたと感じています。

大学生としてボランティア活動に取り組む意義とは

早川　社会人として、また職業として取り組むなら別ですが、学生のうちは荒削りであってもいいと思うんですよね。自分たちが得意で自信を持っている部分やそれぞれのメンバーの個性や特徴を生かして、地域や大学というフィールドの中で動ける楽しさややりがいを感じてもらえたらいいなと思いますし、ある意味守られた場所で思い切りいろいろなことができる4年間だと思います。そのなかでいろいろな人と出会い刺激を受け、それが学びにもつながってもいくのだと思います。

浅石　大学は、学びと実践がリンクするものだということを体感できる場所だと思います。先ほども言いましたがまさに高等教育ですね。周囲を見回すとさまざまな分野の研究をしている先生方がいて、何か疑問が生じたりしたときにはすぐに相談できるのも魅力です。その疑問が自分の研究テーマになることもあるかもしれません。

早川　このコロナ禍でなかなか思ったように活動できないという話が村山君からありましたが、災害に限らず、地域に溶け込みそこに暮らす人たちと向き合って自分に何かできないかと考えるという風土熱人Rの根本は変わっていないと思います。あまり形にこだわらず、これまでの先輩方やメンバーたちの思いを引き継いで活動を継続してくれればいいなと思います。

浅石　活動していくうちに、もっとこうしたらいいとか、こうすると楽しいなとかいろいろと変化していくと思います。そんな思いを大切にしてほしいです。自分たちの気持ちが動くこと、疑問に思うことなどを大事にして、仲間や先生方と相談しながらアクションにつなげていってほしいですね。

村山　先輩方のこれまでの活動の積み重ねで、風土熱人Rの名は地域の皆さんにだいぶ認知されています。「あの学生団体か」と思ってもらえたり、「昔お世話になったからまた一緒に活動しよう」と思ってくださる方々もたくさんいます。そういう環境で活動できることはありがたいなと感じています。コロナ禍にあっていろいろな制限はありますが、がんばっていきたいと思います。